

バレエにおいて「テキスト」とは何か

－バレエの記憶とその伝承に関する 基本的な問題について－

安田 静

〈研究目的〉

演劇、オペラといった他の舞台芸術と比べると、バレエにおいては「テキスト」の意味が遥かに曖昧であり、テキスト自体が不在であることも多い。まず、バレエにおける「テキスト」とは何かを明らかにし、さらに、「テキスト」にまつわるバレエ特有の問題として、作品の保存と伝承に関する諸問題を考察する。

〈研究対象〉

1661年の王立舞踊アカデミー創立以来のバレエの歴史を参照しつつ、考察の直接の対象はヌレエフの舞踊監督就任（1983年）以降のパリ・オペラ座バレエ団のレパートリーとする。

〈研究結果及び考察〉

－「テキスト」とは何か

新ブチ・ロベール（1993）によると、テキストとはまず第一義に、「文書、または作品を構成する言葉及び文章の連なり」である。演劇において「テキスト」といえば台本のことであるが、オペラの場合、セリフ（リブレット）の他に音楽が加わるので、上演のための総譜は「言葉及び文章の連なり」とは厳密にはいえない。ただし、ここでは「テキスト」という用語を演出や解釈の対象となる本体、すなわち上演の基盤となる書かれた媒体、という意味で用いるので、オペラの場合の「テキスト」とは総譜ということになる。

－バレエにおける「テキスト」

それではバレエにおいて「テキスト」とは何か。「白鳥の湖」や「くるみ割り人形」のような「物語バレエ」には筋があるから、それを書き出した文章（梗概）もテキストと呼べる¹はずだが、実際にはそうした「物語」が戯曲のように、上演から離れて独立した作品として読まれることは稀である。また、バランシンの作品のように筋書きを持たない「抽象バレエ」もバレエ作品として自立しているのだから、物語がなくても振付の本体があれば、むしろそれを記譜したものが「テキスト」になるはずである。

言うまでもなく、演劇における「台詞」、オペラにおける「旋律（と台詞）」に相当するのは、バレエの場合「振付」である。従って、舞踊手の個々の動き、そして舞台上の全ての舞踊手の配置と移動を書き表した「舞踊譜」が、バレエにおける「テキスト」だといえよう。ところが、今日のフランスにおいて第一に問題となるのは、「舞踊譜」つまり「テキスト」そのものの不在である。

－テキストの不在

一般に舞踊譜を読める観客は楽譜を読む観客よりも圧倒的に少ない。それどころか、今日のフランス²では舞踊譜を読み書きできるダンサーや振付家は稀である。振付家は舞踊譜を使わずに直接、特定のダンサーの身体の上で振付を描いてゆくわけだから、作品の母体となる部分（＝振付）と、ダンサーに応じてつけ加えた演出とを切り放して考えることは舞踊記譜の専門家にも難しい。

また、作品の著作権についていえば、現在フランスには登録済みの振付家から振付作品の申告を受け付け、著作権料の徴収を行うSACD（Société des Auteurs et Compositeurs Dramatiques＝劇作家・作曲家協会）という組織があるが、現時点で記録の対象となっているのは題名、上演日・上演場所、それに筋書きと音楽だけで、振付に関する記録は何も残されない。動きの芸術でもあるバレエ作品を保存し、伝承しようとする観点からすれば、これではいかにも不十分である。

－バレエの記憶とその伝承

このように、一般にロマン主義以降のバレエについては、作品そのものを伝える媒体としての「舞踊譜」の普及が楽譜に比べ甚だ遅れている。

しかも、作品の再演時、即ち「振付」という身体の記憶を伝承してゆく際には、どこまでの自由な解釈がダンサーやメートル・ド・バレエに許されるのか、という葛藤が常につきまとう。なぜなら、脚本の朗読だけでは決して演劇作品としては立ち上がらないように、決められたパを指示通りに行うだけではバレエ作品にはならず、ダンサーや振付家の解釈なり演出なりがその都度振付につけ加えられなければならないからだ。

この論考では、「テキスト」の不在にまつわるこうしたバレエ特有の問題が、しかしながらバレエという芸術分野をより豊かなものにする可能性をも合わせ持っていることを明らかにする。

¹例えばマーク・フランコ（Mark FRANKO）は *Dance as Text: Ideologies of the Baroque Body* (N. Y., Cambridge University Press, 1993) において、振付のような非言語的形態と、リブレットのような言語的実在の両者をテキストとして考察している。

²18世紀にフランスで整備されフランス国外でも用いられたフェイエの舞踊記譜法は、「音楽の旋律のように」（Raoul-Auger FEUILLET, *Chorégraphie ou l'Art de De'crire la Dance* [Paris, 1700]序文より）書面の形で舞踊譜を流通させることを念頭においてつくられ、この記譜法に則った舞踊譜も数多く出版された。つまり、このころの舞踊譜は音楽における楽譜、演劇における脚本に近い実用的な「テキスト」であった。

本研究は文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。（日本学術振興会特別研究員）